

# 博物館 だより

No.59  
2014.11.1

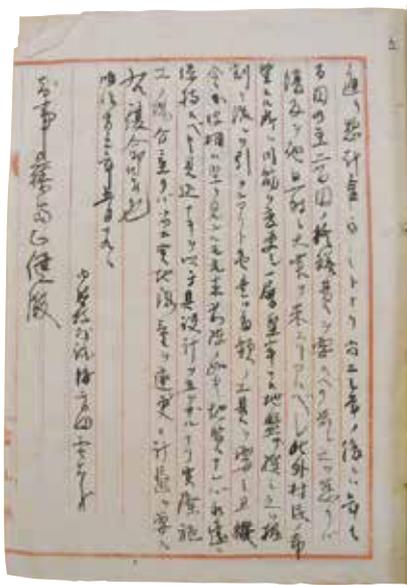
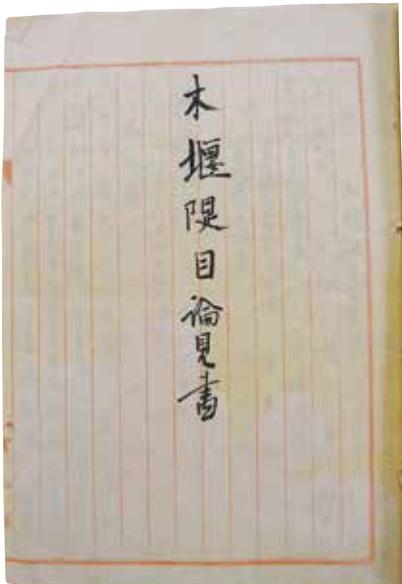
## CONTENTS

- 研究と解説……………2
- 活動報告……………3・4
- 山と川から……………5
- ニュースピックス  
(5月～10月)……………6
- 砂防のページ……………7
- イベント案内……………8



花の上の宝石たち

## 高田家史料【氷見市熊無における木堰堤目論見書】について



この史料は高田家史料に残されていたもので、射水郡熊無村大字論田村(現氷見市熊無)における土地崩壊の被害状況および土砂災害防止策について書かれています。

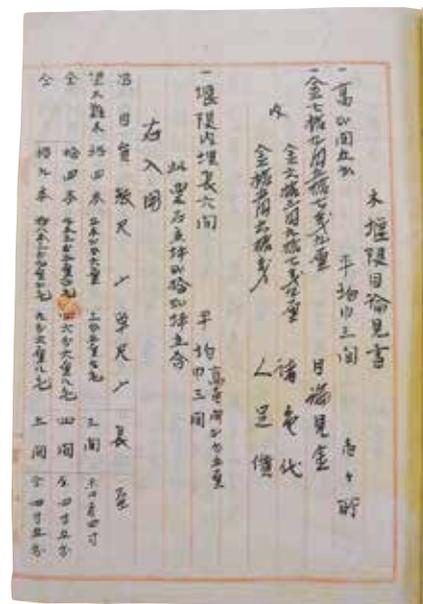
史料によると熊無村は毎年3月～6月に、地滑りが頻繁に起こる土地であったようで、藩政期には藩費で谷川筋のところどころに堰堤を築き、土砂を堰き止めていました。しかし、明治維新後、堰堤修理等を怠っていたために次第に破損が進み、明治22(1889)年6月と翌23(1890)年の出水で大部分が破壊・流出され30数カ所

あったものがたった2カ所を有するのみとなりました。明治23年4月、熊無村の土砂災害防止対策について当時の藤島正健富山県知事から命を受けた高田雪太郎技師が実地調査を行い対策を計画したものが「木堰堤目論見書」です。

熊無村を含め氷見地方の山間地帯(坪池・土倉・赤羽毛・床鍋・三尾・論田・熊無・寺尾・懸札・国見・小滝・角間)は現在も地滑り地帯ですが、明治以前から被害に悩まされていたようです。村御印(江戸時代に加賀藩で行われた年貢の取り決め書)によると、寛文10(1670)年については熊無村 村高が373石であったのが、天明6(1786)年には314石であり59石の減少が見られます。村高の減額は年貢の減少になるため、大洪水で田畑が流されたり、大規模な天変地異でない限り容易に認められることではありませんでした。そのため熊無村の石高の減少は、以前に大きな地滑りがあったことによるものと推定され、古来地滑りに悩まされてきたことが窺えます。

高田はこの報告書の中で地滑り対策を立案し木堰堤の工費および工事に係る人件費等の概算を立てています。この計画が実際に行われたのかは定かではありませんが、高田家史料における堰堤についての史料は数少なく、貴重な史料であるといえます。

(学芸課 是松慧美)



## 特別展

### 「立山へ行こう」

—より楽しむコツ博物館が教えます！—

—4月15日(火)～7月13日(日)

立山の美しく、雄大で繊細な景観と豊かな自然環境が形成された過程を5つのテーマ(キーワード)「上昇する山」「火の山」「水の山」「氷の山」「生命の山」に分けて紹介しました。各テーマに幾つかの見所となる観察ポイントや景観を、それらができた仕組みについて写真と解説文を交えたパネルで紹介し、ジオラマ模型や映像でそれぞれの場所を確認して探訪することができるようにしました。

人はなぜ自然景観の美しさや雄大さに感動を覚えるのでしょうか。それは自身の経験や教科書に学んだ知識や想像を超えた規模の存在に圧倒されたり、人間には為し得ない自然の造形の希少性や儚さに潜在的な美意識を掻き立てられたりすることによる一種の高揚感なのかもしれません。人は理解を超えたものの存在に心を奪われる生きものです。この特別展はそうした人の好奇心・探求心に働きかけ、目前の景観が形成されたルーツを知



る「きっかけ」を作り出すことに努めました。このことによって新しい発見に対する感動とさらに次の疑問を生み出す連鎖に繋がると考えたからです。

立山をより深く知りたい、巡りたい。立山に「ハマった」、新しい「立山ファン」がこの特別展を通して増えてくれたのではないかと期待しています。(学芸課 丹保俊哉)

## 巡回展

### 「画家たちが見た富山」

—富山県立近代美術館収蔵

『富山を描く120景』より—

—4月19日(土)～5月25日(日)

今年も富山県立近代美術館のご協力を得て、巡回展を開催しました。今年は、「画家たちが見た富山—富山県立近代美術館収蔵『富山を描く120景』より—」と題し、同館の所蔵するコレクションを展示しました。

「富山を描く120景」は、日本を代表する画家たちが実際に富山各地に足を運び、自然、文化、風景などを描きとめた作品で構成されています。今回の巡回展では、平山郁夫の「潮」など、計11点を展示しました。

画家たちの眼を通して描かれた、富山のさまざまな表情をお



楽しみただけなのではないでしょうか。

開催期間中、9,282名の方々にご観覧いただきました。

(学芸課 是松慧美)

## 土砂災害防止月間特別展

### 「霧島火山」

—5月31日(土)～7月13日(日)

2011(平成23)年1月、九州の新燃岳(霧島火山)が数百年ぶりに軽石噴火を起こし、私たちの社会生活に大きな影響を与えました。火山は、ひとたび噴火すると大変な災害をもたらしますが、噴火のない時期にはすばらしい景観や温泉などの恵みをもたらします。

全国火山系博物館連絡協議会では、火山をより深く正しく理解するため新燃岳2011年噴火をもとに、火山の脅威と恵み

について考える巡回展を開催しました。標本やパネル、模型に直接投影するプロジェクションマッピングなどにより、火山について関心を深めたとの感想を頂きました。



(学芸課 菊川 茂)

## 企画展

### 「立山登山 ー山岳の魅力とリスクを考えるー」

ー 7月19日(土) ～9月28日(日)

立山を登山することで体験できる自然の魅力と、そこに潜んでいるリスクについて詳しく紹介しました。自然の魅力では、立山の地学的な特色を「上昇する山」「氷の山」「火の山」「水の山」の4つのキーワードに分けてコーナー展示しました。「上昇する山」では稜線に分布する花崗岩等の岩石標本を、「氷の山」では雪の壁や現存する氷河の様子を、「火の山」では立山火山の火砕流により堆積した溶結凝灰岩等を、「水の山」では称名滝周辺の水による侵食の様子を詳しく紹介しました。

また、リスクのコーナーでは、昨年立山で大きな遭難事故を起こした雪崩について疑似体験してもらう大規模な実験を実施しました。この実験は、博物館屋内の3階吹き抜けホールに長さ13m、傾斜30度の斜面を作り、ピンポン球1万個を流してその衝撃力や運動の形を体験するもので、企画展開催中毎日3回実施し、1万名を超える方に体験してもらうことができました。博物館内には連日歓声や驚きの声が響き、子供から大人まで大好評でした。また、近年短時間豪雨が増加し、土石流等による災害が増していることから、砂山に水を



ピンポン球雪崩実験

かけて土石流の発生や扇状地の形成等を再現する実験を行いました。水による侵食で土砂が移動し、実際の山に近い姿の砂山が形成される様子に、見学者から驚きの声が上がりました。さらに、劔岳の岩場を模した「カニのヨコバイ」コーナーは、難しいトラバースに挑戦する子供たちで賑わいました。期間中の入場者は約1万3,000名に達しました。(学芸課 飯田 肇)

後援／独立行政法人 日本スポーツ振興センター国立登山研修所、公益社団法人 日本山岳ガイド協会、立山山荘協同組合、立山ガイド協会



展示室内の様子



「カニのヨコバイ」クライミングウォールに挑戦

## 花の上の宝石たち



花の上の宝石たち フタコブブリハナカミキリやアオハムシダマシは光沢が美しい

春が来て、夏へと季節が進んでいく中で、山では数多くの花が見られます。花に集まる昆虫といえば真っ先に目にとまるのは美しい翅をもったチョウですが、目を凝らして花の上をよく見てみると、きれいな色の小さな虫たちの姿が見えてきます。カミキリムシやハナムグリなどの花粉を食べに集まってきた甲虫たちです。彼らにとって、花は貴重な栄養を摂る場であるとともに、繁殖のための出会いの場にもなっています。

花で見られる甲虫は形や大きさ、色もさまざまで、強い光沢を持って体全体が輝くものもあれば、つや消しの渋い美しさを持つものなど、まさに生きた宝石です。春のウワミズザクラやミズキで見られるもの、ノリウツギなど盛夏の花に集まるものなど季節ごとに見られる種類も変わっていきます。また、一つの種に注

目してみると、一匹ごとに模様が異なったり、オスとメスは別の色だったり個体ごとの違いを楽しむことができます。

花といっても種類は数多くありますが、ハナカミキリなどの甲虫が特に好むのは小さな花が密に集まっているものです。ミズキやシヨウマ類、シシウドやオオハナウドといったセリ科の花、中でもひときわ虫を集めるのはノリウツギです。これらの花は有峰からカルデラ内にかけて当館の体験学習会でも目にする機会が多くあります。

深緑の中、美しい花にたくさんの昆虫たちが幸せそうに群がる風景は、森の中の楽園と言えるでしょう。

(学芸課 澤田研太)



花上で交尾するアオアシナガハナムグリ



ノリウツギに飛来するヨツスジハナカミキリ

# ニューストピックス (5月～10月)

## フィールドウォッチング 「春の立山 雪の大谷」

— 5月9日(日)

春の立山の一大名所「雪の大谷」を雪の研究者と共に深く楽しむ観察会を行いました。「雪の壁」は人気スポットで大変混雑するため、立山自然保護センター協の「雪の回廊」で、今冬の積雪についての研究成果をもとに解説を行いました。雪の壁には冬の気象条件や、黄砂などの遠く大陸から飛来した物質がとりこまれて層になっているなど、さまざまな情報が含まれていることが分かりました。予備知識を得て「雪の大谷 雪の壁」を観察すると、「高い」「すごい」だけじゃない「雪の壁」の秘密に迫ることが

ことができました。午後のミクリガ池一周の散策ではライチョウにも出会え、「立山の雪を存分に堪能できた」と好評のうちに終了することができました。



(学芸課 飯田 肇)

## フィールドウォッチング 「立山の氷河眺望」

— 8月23日(土)

フィールドウォッチング「立山の氷河眺望」は雄山山頂から御前沢氷河を眺望するツアーです。途中、山崎カールや浄土カールを遠望して立山周辺の氷河地形についての解説を行ったり、残雪が残っている場所で積雪密度観測の実演を行ったりしながら、雄山山頂を目指しました。室堂周辺には山崎カール以外にも氷河地形が沢山あることを聞いて、驚いた参加者も多かったようです。今年は一日中晴天に恵まれ、山頂からは氷河の全貌



をじっくりと観察することができ、充実したフィールドウォッチングになりました。

(学芸課 福井幸太郎)

## フィールドウォッチング 「室堂山・浄土山とカルデラ展望」

— 9月6日(土)

立山カルデラの崩壊壁を構成している室堂山と浄土山を訪れて、その内外の境界に立ち自然の有り様の違いを直に触れてもらいました。室堂山と浄土山は、立山地域の中でも比較的登山の難易



度は低いものの、様々な地形や地質、環境、動植物の観察ポイントに富み、岩山登山の楽しさをも気軽に満喫できる学芸員お薦めの登山コースです。

この日は少しひんやりとしましたが、高曇りで視界も良好、室堂山では遠く槍ヶ岳まで望むことが出来ました。立山カルデラの中は至る所に灰色や褐色の風化や侵食の進行が激しく進んだ火山の地形がむき出しになっていて、崩れやすい大地であることが判ります。一方で、反対側の雄山や浄土山を見れば、固い花崗岩が3000m級の山体を力強く支えています。どちらも同じ立山の表情ですが、隣り合わせに存在する雄大さと険しさに自然の不思議な力を感じずにはいられません。

(学芸課 丹保俊哉)

## フィールドウォッチング 「秋の弥陀ヶ原とカルデラ展望」

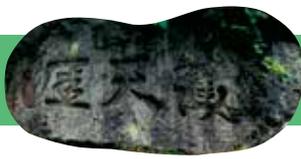
— 10月4日(土)

今年の紅葉は綺麗であると、新聞やニュースでの高い前評判を聞き、参加者一同、心を躍らせながらバスで弥陀ヶ原へ向かいました。午前中は、いくつかの班に分かれ、自然解説を聞きながら松尾峠までの道を散策しました。鮮やかな黄色に色づいたカエデの仲間や真紅に変わったナナカマドが目を楽しませてくれました。お昼時には弥陀ヶ原ホテルの一室をお借りして、スライドを使ったスライドショーで四季折々の弥陀ヶ原に住む生き物や植物を紹介。午後はラムサール条約の登録湿地周

辺を散策しました。自然散策で出会う景色や出来事はその時々が一期一会。今回のフィールドウォッチングをきっかけに、また違う季節にも弥陀ヶ原に来てみたいね」との参加者の声が聞かれたのはうれしいことでした。



(学芸課 後藤優介)



## 立山カルデラ砂防体験学習会に新コース誕生！

立山カルデラを実際に訪れて自然と歴史、そしてそこで行われている砂防事業を自分の目で確かめることができる体験学習会(年間45回程度実施、詳しくはホームページ参照)。近年、トロッコを利用するコースに人気が集まっていますが、実は往復でバスを利用するコースではさまざまな特徴的な見学ポイントがあり、ゆっくり・じっくり体験したい方には非常におすすめです。富山県での「立山・黒部」世界文化遺産登録の推進を機に、平成25年度からはこれまでに見学していなかったポイントを加えた新たな2コースを開設しました。過去に参加されたことがある方も、是非2度目、3度目の参加に挑戦してください。きっと、これまで気付かなかった新たな発見があるはずですよ。

ここがオススメ！

### 「文化遺産巡りコース」

(平成26年度は金曜日に計6回計画)

日本一の貯砂量500m<sup>3</sup>を持ち、中流域の砂防施設の要となっている本宮砂防えん堤を下車してじっくり見学できるのはこのコースだけ。親水公園として整備されており、環境に配慮して設置された巨大な魚道(魚がえん堤を超えて上流へ移動するための通り道)なども見学できます。現在は登録有形文化財に指定されていますが、さらに国の重要指定文化財の指定に向けて作業が進められているところです。他にも過去の激しい浸食による荒廃から一変して、緑へと変遷が著しい「泥谷砂防えん堤群」などカルデラ周辺の文化遺産を重点的に巡るコースです。



本宮砂防えん堤

ここがオススメ！

### 「常願寺川流域コース」

(平成26年度は金曜日に計3回計画)

このコースの特徴は何といっても常願寺川の上流から下流域を1日でまるごと体験できる場所。上流部の崩壊現場を見学しただけではイメージすることが難しかった平野部での災害の歴史や河川と共に生きる人々の暮らしについて総合的に体感することができます。具体的には上流部の立山カルデラで立山砂防施設の要「白岩砂防えん堤(国の重要文化財)」を見学した後、常西合口用水では先人たちの水利用の知恵を知り、平野部に点在する大転石では過去の災害の凄まじさに思いを馳せ、最後に安政の飛越地震に由来のある延命地蔵でおいしい水を頂き水の恵みを享受します。本コースのみ富山駅前集合・解散になっていますので、お気軽にご参加下さい。



大場の大転石

(学芸課 後藤優介)

# イベント案内 (10月～3月)

開催日	内容	会場(入場料など)
10月4日(土)～ 12月27日(土)	●特別展「立山温泉をめぐる人々と歴史」 険峻な山岳にありながら、江戸時代より交通の拠点として賑わってきた立山温泉について、そこを訪れた人々をたどりながらその歴史を探ります。	当館：企画展示室（無料）
1月31日(土)、 2月8日(日)	●フィールドウォッチング「立山の雪を体験しよう！」	要申し込み（先着順）定員20名 参加費：500円（小学生200円）
1月10日(土)～ 2月11日(水)	●写真展「素晴らしい自然を」 日頃から自然に接している人々が感じた自然のすばらしさや大切さを表現した写真を紹介します。	当館：企画展示室、エントランスホール（無料）
2月14日(土)～ 3月8日(水)	●特別展「映像で見る立山・立山カルデラ・砂防」 大災害をもたらす自然現象をとらえた貴重な映像や、土砂災害防止のために日々行われている砂防事業に関する映像を紹介します。	当館：企画展示室（無料）
3月14日(土)～ 4月12日(日)	●公募写真展「レンズが見た立山・立山カルデラー大地と人の記憶」 立山や立山カルデラ、常願寺川一帯の大地や人の営みをテーマに、魅力ある作品を公募して紹介します。	当館：企画展示室（無料）

## Calendar 10月から3月の休館日

※ 小・中・高校生の観覧は無料です。

○：休館日 赤：日曜・祝日・祭日

10



11



12



1



2



3



【博物館 開館時間】 9:30～17:00  
(入館は 16:30まで)

### 交通案内

富山地方鉄道 立山駅より徒歩 1分  
北陸自動車道 立山ICより車で40分  
富山ICより車で45分



### 〈編集後記〉

先日博物館のイベント「秋の有峰と常願寺川砂防治水探訪」で有峰を訪れました。

このイベントは毎回天気恵まれていたのですが、今年は特に今までにないほどの快晴に恵まれました。雲一つない青空に赤や黄色に色づいた木々がとても綺麗に映え、とても気持ちの良い1日となりました。

これも、参加者の皆さんの日頃の行いが良いからなのでしょう。

編集・発行 公益財団法人立山カルデラ砂防博物館

〒930-1405 富山県中新川郡立山町芦崎寺字ブナ坂68  
TEL (076) 481-1160 FAX (076) 482-9100  
ホームページ <http://www.tatecal.or.jp>



この印刷物は古紙100%再生紙を使用しています。